V+m+kokochisuandV+kokochisu

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/464

「セム心地ス」と「スル心地ス」―源氏物語を中心に―

"V+*mu*+*kokochisu*" and "V+*kokochisu*" —A Study Mainly Based on *Genji Monogatari*—

近藤　明
Akira KONDOH

一　問題意識と先行研究

古代語において、推量系助動詞（特に「ム」を中心としたいわゆる「はねてには」）が、連体修飾・準体法等、文末以外の位置で用いられる場合、直訳的に現代語に置き換えにくく、それをすると不自然に感じられる文になることが多い。このことは、早く富士谷成章『あゆひ抄』に、

たとへば「帰らむ人に」「逢はむ日までに」など言ふべき詞を、里には「帰る人に」「逢ふ日までに」とも言ふたぐひなり。

との言及があり、本居宣長『古今集遠鏡』には、

語のつづきたるなからにある「ん」は、多くはうつしがたし。たとへば「見ん人は見よ」「ちりなん後ぞ」「ちるらん小野の」などのたぐひ（中略）、此類は、俗語にはただに、「見ル人ハ」「チツテ後ニ」「チル小野ノ」とやうにいひて、「見ヤウ人ハ」「チルデアラウ後ニ」「チルデアラウ小野ノ」などはいはざれば也。

との記述が見られる。[1]

このような場合の「ム」「ラム」等の意味は、「婉曲」として処理されることもあるが、小松光三（一九九二）は、用例を検討しても婉曲表現採用の理由が見当たらないとしており、三宅清（一九九六）の「結局『推量』表現が現代語において連体構造の中に入りにくくなった結果（中略）、便宜的に生じた意味と考えられる」との批判が当を得ていよう。

この問題に対しては、古代語においてはどのような場合に、「ム」等の推量系助動詞が非文末の位置で使用されるのか、それが現代語において衰退していることが推量表現・モダリティ表現、あるいは（連体法の場合であれば）連体修飾の史的変容の中でどう位置づけられるのかといった観点からの解明が必要と考える。そのような観点を持ってこの問題を扱っている論としては、右に示したものの他に、北原保雄（一九八四）、山口明穂（一九九一）、山口堯二（一九九一）、尾方理恵（一九九六）、三宅清（一九九八）、高山善行（一九九八）（二〇〇一）、尾上圭介（二〇〇一）がある。中でも筆者が関心を惹かれるのは尾方、尾上の論である。尾上は、古代語「ム」は終止法と非終止法とで表層的意味が異なるが、それらを通じて「ム」は「非現実事態仮構の叙法」であるとしている。更に動詞基本形（終止形）は古代語では現実事態構成の叙法

平成13年10月1日受理

であったものが、「ム」などとの緊張関係の消滅・変化によって単なる事態構成の叙法へ変化したとする見通しも興味深い。

尾方は、尾上の考えをベースとしつつ、中古語の「ム・ラム・ケム」について具体的考察を行っており、非終止法の「ム・ラム・ケム」が表す事態を、「事実性を問題としない（事実性を欠く）事態・既存の事態であるが話し手が確認していない事態・まだ起こっていない事態」に大別し、それを更に細分して論じている。その上で、「事態が事実として確認されていないという把握」において、「ム・ラム・ケム」の非終止法は終止法と共通しており、非終止法に特有と見られる意味も、終止法における「推量」と共通の根を持つものであるとしている。

二　前稿での議論

前述の尾方の論は、具体的な用例を挙げての詳細な論でもあり、うなずける点も多いが、「ム・ラム・ケム」を伴わない動詞基本形が同様の環境に位置した場合と比べてどうかという点など、更に知りたく思われる。もっとも単に「ム・ラム・ケム」を伴わない動詞基本形というだけでは、該当の用例が多すぎて、手のつけようがないということになりかねない。

そこで現実的な策として、連体修飾の場合であれば、被修飾語となる名詞を何か決めておいて、それを「ム・ラム・ケム」が修飾する場合と、「ム・ラム・ケム」を伴わない述語が修飾する場合とを比較するといった方法が考えられる。

管見の限り、このような方法を最初に採用したのは高山善行（一九九八）で、高山は共通の名詞「人」を、「ム」が連体修飾する例と「ム」のない述語が修飾する例とを比較し、「ム＋人」の方は話し手の仮想する非現実世界で用いられるとしている。（ただし、その後の高山善行（一九九八）では、「意味から入っていったのでは、われわれが情報として共有できる客観的なデータとはなりがたい」として、上接語と主名詞に注目するという観点をとっている）

近藤明（二〇〇一）――以下「前稿」と称する――は、高山善行（一九九八）に倣う形で、「ヤウナリ」に「ム」が上接する「セムヤウナリ」と、「ム」のない動詞述語が上接する「スルヤウナリ」との比較を、源氏物語を資料として、試みたものである。

もっとも「ヤウナリ」の「ヤウ」は、名詞に由来するものであったとしても、[2] 形式名詞化あるいは助動詞化して、典型的な名詞とは異質なものとなっていた可能性もあり得る。その点において、高山の取り上げた「人」のような典型的な名詞の場合と、同列に論じ得ない部分があるかも知れず、その点への顧慮も必要であろう。また尾上、尾方の言う「非終止法」は連体法だけではなく、尾方の場合で言えば、準体法、疑問文終止法、「ト」によって引用される終止形・連体形といったものを含んでいることにも注意しておくべきだろう。さらに高山の言う意味から入ることの困難性も、否定はし難しいところがある。

だが一方で、「セムヤウナリ」と「スルヤウナリ」には論じに値する程度の意味的な相違が認められるように思われ、かつその相違が「非現実事態仮構」「事実性を問題どしない事態」といったことと方向性が合致しそうであり、その点に興味を感じたところから、前稿ではこれを検討の対象としたものである。

以下前稿での考察の概略を、紙幅の関係等で説明不十分だった点の補訂なども多少交えつつ、述べておく。まず用例の傾向としては

㊀「セムヤウナリ」は、二一例すべてが比喩として用いられている。

㊂「セムヤウナリ」の比喩は、現実にありえない架空性の強い事態に例えた比喩や、慣用性・常套性が薄そうな一ひねりした感じの比喩が目につく。

㊃「スルヤウナリ」には、比喩ではなく単に「～する様子である」といった意に解される例が少なからずある。また慣用性・常套性が高いと思われる比喩は「スルヤウナリ」の方に目立つ。

といったことが認められた。

㊀の点に関しては、比喩行為が成立するためには「表現主体側に、その発言が文字どおりには事実でない、という意識のあることが必要」（中村明（一九七七）　p一八）、「実際には別々の事物だという明確な認識のもとに、その両者の類似性をとらえ、一方にたとえるという修辞意識を持つ時に、初めてそれが比喩表現となる基盤が得られる」（同　p一一一）という考えに注目したい。「AはBセムヤウナリ」であれば、「Bセム」の部分で述べられていることが、文字どおりには事実でないという明確な認識があるということになり、尾上の「現実と接触しない非現実事態仮構」、尾方の「事実性を問題としない事態」（とりわけその中の「仮想事態」）といった指摘と符合することと思われる。

㊁の点に関しては、架空性の強い事態に例えた例というのは（それが後述の慣用化・常套化した比喩でない限りは）、「Bセム」の部分で述べられていることが「文字どおりには事実でないという意識」が殊に明確に伴っているものということになろう。

一方、㊂に関しては、比喩ではなく単に「～する様子である」と解される例というのは、「AはBスルヤウナリ」の「Bスル」の部分で「非現実事態仮構」がなされていないものと言える。また慣用化・常套化した比喩というのは、AとBの結びつけ方において既成のものを踏襲しているわけであるから、実際にはAとは異なる事態であるBを想定し、それをAと比べるという比喩意識が、比喩の既成化・固定化の中で稀薄化することが考えられる。例えば現代語の「鳩が豆鉄砲を食ったようだ」「（商品の売れ行きが）飛ぶようだ」といった慣用的・常套的比喩を考えてみても、文字通りのそのような事態を、常に明確に想定・仮構しているというわけではないと思う。とすればその場合「Bスル」の部分での「非現実事態仮構」も、稀薄化・非自覚化の方向にあるものと考え得る。

「セムヤウナリ」に関する㊀㊁の傾向、「スルヤウナリ」に関する㊂の傾向を以上のように考えると、結局「セムヤウナリ」の方は「非現実事態仮構」性が強く、「スルヤウナリ」の方はそれが弱いという方向に収束することのように思われた。

三　本稿での議論の対象

本稿では、前稿でのこのような議論を踏まえつつ、語源として名詞に由来し比喩・比況表現にも用いられるという点で「ヤウナリ」と共通点を持つ「心地ス」を取り上げ、やはり「セム心地ス」と「スル心地ス」を比べるという方法で、考察を進めることにする。

「心地ス」の「心地」は、名詞として「気持ち」「気分」のような意を表すが、[3] 青島徹（一九五一）は、そのような「第一義」に加えて、「有様」「様子」「感じ」といった意の「第二義」を認めるべきだと主張している。「第二義」は、「第一義」の「気持ち・気分」から、「そのような気持ち・気分を抱かせる有様・様子」の意に転じたものであろうか。なお青島の挙げている「第二義」の「心地」の用例は、いずれも複合サ変動詞化した「心地ス」の形で用いられているものである。

神谷かをる（一九九五）で、「ヤウナリ」「心地ス」が近接して用いられている例の存在を指摘して「両者とも比喩で、単に同語反復を避けただけかもしれない」とされるように、「心地ス」は比喩表現にも用いられる。比喩に用いられている「心地ス」のうち、「あたかも～ような気持ち・気分である」と解されるものは、「心地」が青島のいう「第一義」の「心地」に由来し、「あたかも～ような様子・感じである」と解されるものは「第二義」の「心地」に由来すると考えられよう。

本稿で「セム心地ス」と称するのは、この「心地ス」を、「ム」を中心とした推量系助動詞を伴う動詞述語が修飾するものである。なお推量系助動詞には、「ム」系の「ラム」「ケム」までを加えることとする（実際の用例では殆どが「ム」であるが）。また「スル心地ス」と称するのは、「心地す」を、推量系助動詞を伴わない動詞述語（動詞が推量以外の助動詞を伴うものは含める）が修飾するものである。

資料としては中古の和歌・和文を用いるが、特に「セム心地ス」「スル心地ス」ともにある程度まとまった用例数を有する源氏物語を中心に論を進めていく。

なお、「セム心地ス」のうち、「ム」が意志の意と見られるものが、後撰集で一例中一例、源氏物語で十七例中七例見られるが、これは本稿での検討の対象には加えない。ちなみに「ム」が意志の意と見られるもののうち、後撰集の一例および源氏物語の七例中六例は、「宰相さらに立いでん心地せで」[4]（源氏　須磨　四三三⑫）のように、否定を伴うものである。

四　「セム心地ス」

「セム心地ス」のうち、「ム」が意志の意と見られる例を除いたものの一覧を、表に示す。源氏物語では十例が認められるが、これらのいずれもが、「セム」の部分で述べられていることが、非現実の事態であることが、主体もしくは書き手によって明確に認識されていると思われ、比喩・もしくは比喩の可能性があるものである。源氏物語以外の資料では、「むまのたとひの侍らん心地して」（宇津保　一一九二⑪）という内容のはっきりしない例もあるが、それ以外の例には右と同様のことが言える。これは前述の「セムヤウナリ」の㈠の点に相当すると言える。続いて比喩の内容の検討に移ろう。

【現実にあり得ない事態・現実との隔りの大きい事態への比喩】

先に㈡として挙げた「現実にあり得ない架空性の強い事態に例えた比喩」に当たりそうなものは、源氏物語では

①かう嬉しきをりを見つけたるは、仏などの現れたまへらんに参りあひたらむ心ちするも　（源氏　竹河　一四七七⑩）

がある。源氏物語以外では「御念仏の折に参りあひたれば、極楽に参りたらん心ちす」（栄花　下八七⑨）「隠れ蓑ぬぎたらん心ちして」（寝覚　巻五　三五九⑧）などがこれに該当しようか。

なお、これと似た面があると思われるものとして、現実との隔たりが大きく、また主体である人物の主観としても全く現実とは感じられない事態に例えた比喩の例が挙げられる。例えば

②母なき子持たらむ心ちして　（源氏　紅葉賀　二四一⑭）

は、源氏が幼い紫上に対して抱く感覚であるが、「母なき子」を持つという事態は、①で述べられているような事態と比べて、一般論としてはあり得ないことではない。しかし源氏にとって紫上がそういう存在でないことは明らかであるし、主観的に源氏が本気でそうであるかのように感じてしまう、ということでもないであろう。「女親なき子ををきたらむ心ちして」（源氏　葵　三一

二⑧）という例も同様のことが言える。また

③夜の明くるほどの久しさは、千世をすぐさむ心ちし給。

（源氏　夕顔　一二六⑬）

という例も、実際は一夜を明かしただけであるのだから、現実との隔たりは大きい。当事者の源氏にとっては主観的に非常に長い時間に感じられはしただろうが、それにしても「千世をすぐ」すとはかなり誇張が入っていよう。

時間経過の早さ・遅さに関連した表現ということでは、「スル心地ス」の方に次のようなものがある。

④（玉鬘を六条院に迎えてから）年ごろになりぬる心ちして見たてまつるも、心やすく本意かなひつるを

（源氏　初音　七六七④）

こちらは、現実には玉鬘を迎えてから二か月ほどしか経っていないのを、源氏が「年ごろ」のようだと言っているのだが、現実の時間経過との隔たりは③に比べると遥かに少なく、源氏自身の主観的感覚としても、何割かは実感に近い部分がある（あるいはそう感じているように装っている）ように思われる。

また

⑤まことの知らぬ国にきたらむ心ちして、あはれにおもしろく、見ならはぬ女房などは思ふ。

（源氏　胡蝶　七八二①）

という例は、六条院での船楽の場面で、舟や童を唐風に仕立てた様子が、知らぬ国＝唐に来たようだというのだが、そこが実際の異国ではないという点では現実との隔たりは大きい。女房たちも、そこが六条院の一角であることは重々承知の上であるはずで、彼女らの主観としても、本気で実際に知らぬ国に来たと思ったわけではないだろう。

一方、これとほぼ同様の表現が「スル心地ス」の方にもある。

⑥正身（浮舟）の心地はさはやかに、いいさかものおぼえて見

表「セム心地ス」用例一覧

○「心地」の前の部分までを示す。
○「ム」が意志の意のものは除く。
○カッコ内は古今集が歌番号、他は頁数・行数。

古今	薬けかせるけだものの雲に吠えけむ（一〇〇三）
蜻	いろふしに出でたらん（九四⑦）
宇	むまのたとひの侍らん（一一九二⑪）
源氏	母なき子持たらむ（一二四一⑭） 女親なき子をもきたらむ（三一二⑧） 千世をすぐさむ（一一二六⑬） 知らぬ国にきたらむ（七八二①） 二月の中の十日ばかりの青柳のわづかにしだりはじめたらむ（一一五三①） 露草してことに色どりたらむ（一二七一⑭） 仏などの現れたまへらんに参りあひたらむ（一四七七⑩） 中に身もなき雛をふせたらむ（一六六〇③） 聖のもの、世にかへりいでん（一七〇五⑨） 玉にきずあらん（二〇二一⑭）
栄花	憍梵波提がいひて、水になりて流れけん（上一二五⑦） 夢さめたらむ（上一九三⑥） 極楽に参りたらん（下八七⑨） 絵にかきたらん（下四七五⑫） 雪の山に入りたらん（下五一五⑯） 源氏のかかやく日の宮の尼になり給願文よみあげけん（下五四四⑧）
浜松	月日の光をならべて見ん（二〇〇⑥） 五重の扇などをひろげたらん（二四七⑬） ただ今見たてまつらん（三一九⑮） 御声などをほのかに聞きつけきこえたらん（三二四⑩） 姥捨山の月を見ん（三七九③） かげろふなどのあらん（四三一⑧）
寝覚	いまはじめたらん（一九二⑩） ただ今もこのわたりにたちそひて見ん（二二五⑮） おそろしからん夢のさめたらん（二二八①） 隠れ蓑ぬぎたらん（三五九⑧） 姥捨山の月見む（三九八⑯）
狭	さかりの御身をやつし給はん（三七七⑫）
大鏡	年ごろ闇にむかひたるに、朝日のうららかにさしいでたるにあへらん（五八⑫）

まはしたれば、一人見し人の顔はなくて、みな老法師ゆがみおとろへたる者のみ多かれば、知らぬ国にきにける心ちして、いと悲し。（源氏　手習　二〇〇〇⑬）

浮舟が身投げして助けられ、意識不明の状態から回復しつつある場面であるが、「知らぬ国にきにける」ということと現実との隔たりは、⑤と変わらず大きいように見える。ただこの直後に「住みけむ所、だれといひし人とだに確かにはかばかしうもおぼえず」という描写があるように、浮舟は記憶も確かでない半ば夢うつつの状態で、彼女の主観に関して言えば、「知らぬ国にきにける」ということを、時として本気で実際のことであるように感じてしまう部分が何割かはありそうである。

【慣用性・常套性が薄そうな比喩】

先の㊂で「セムヤウナリ」のもう一つの特徴として、比喩としての慣用性・常套性が薄そうな一ひねりした感じのものが多いと述べた。内省の利かない中古語の比喩について、慣用性・常套性が薄いか否かの判断は、同一作品内もしくは先行作品に同様の比喩がどの程度見られるかといった点から推測するしかなく、判断の難しいところがあるが、次の例などは慣用性・常套性が薄い一ひねりしたものと考えられる。

⑦ただいとあやかてにをかしく、二月の中十日ばかりの青柳のわづかにしだりはじめたらむ心地して（源氏　若菜下　一一五三①）

女性の美しさを単に花などの植物に例えるというだけの比喩ならば、常套的な陳腐な比喩になりかねまい。しかしこの例では、ただ青柳というだけではなく、二月の中旬という時期まで特定されており、山口仲美（一九八五）ではこれを「考えて練り上げられた直喩」の一例として取り上げている（p一七三）。こういうものは既成の比喩を踏襲しているわけではないから、「AはBセム心地ス」の「Bセム」の部分では、現実と異なる事態の想定・仮構が、非常に意識的・自覚的に行われていると考えられる。

これ以外では、

⑧（幼い薫の）かしらは露草してことさらに色どりたらむ心ちして（源氏　横笛　一二七一⑭）

⑨（病床の大君は）中に身もなき雛をふせたらむ心ちして（源氏　総角　一六六〇③）

なども、念入りに作り上げられた比喩としてこの中に加えられるかと思う。

ただし、「セム心地ス」のすべてについて同様のことが言い切れるわけではないし、特に源氏物語以降の作品での用例を見た場合、多分に慣用的・常套的と思われる比喩も含まれている。例えば

⑩「五重の扇などをひろげたらん心ちして」（浜松　巻二　二四七⑬）

のように、髪を（五重の）扇を広げたところに例えるのは、浜松中納言物語には繰り返し現れており「もはや活々した効果を失っている」（山口仲美（一九八四））比喩と考えられる。

右のような常套的・慣用的と見られる比喩の例の存在も念頭に置かなければなるまいが、全くの実感を表すような例は存在せず、概して「セム心地ス」は（殊に後述の「スル心地ス」と比べた場合）、「セム」の部分で、事実と異なる（とはっきり意識される）事態を想定するという性質が強いのではないかと考えられる。

五　スル心地ス

「スル心地ス」は、前述の通り、「動詞（＋推量以外の助動詞）

＋心地ス」というものであるが、源氏物語において用例数は二三五例に達する。以下、分量の都合上、「スル心地ス」については桐壺巻から少女巻の用例を中心に考察することにする。この範囲での「スル心地ス」の用例数は七四例となる。

【実感に近いもの】

前稿では㊂として、「スルヤウナリ」には比喩ではなく単に「～する様子である」といった意のものがあることを述べた。「スル心地ス」にもこれに相当するもの、即ち「（実感として）～する気持ちである・～する感じである」という意のもので、これは「セム心地ス」の方には見られなかったものである。例えば

⑪（物の怪に夕顔を取り殺された源氏は）いとあはたたしきにあきれたる心ちし給。　（源氏　夕顔　一二五⑪）

⑫（源氏は）小君いでくる心地すれば、やをら出で給ぬ。　（源氏　空蟬　八八⑫）

のような例である。⑪はこの時の源氏の心境そのものであろうし、⑫も「やをら出で給ぬ」という行動をとったことからも分かるように、実感として小君が来ると感じたのであろう（実際そうだったのであるが）。「物におそはるる心ちしておどろき給へれば」（夕顔　一二二⑪）なども⑫と同類であろうし、

⑬神鳴りひらめく。おちかかる心ちして　（源氏　須磨　四三五⑫）

も、実際人々の頭上に雷が落ちかかりはしなかったものの、そうなるような切迫した実感があったということであろう。

七四例中、六割ほどからそれ以上が、これに相当すると思われるが、この他で

⑭（明石入道が源氏を）見たてまつるより、老い忘れ齢のぶる心地して　（源氏　明石　四四九⑦）

のような「（齢・命が）のぶる・のびぬる心地す」（少女巻以降も含めると全三例。他資料にも用例あり）など、実感なのか比喩なのか判然としないものがある。また

⑮「言ふかひなき御こと（葵の死）は、ただかきくらす心ちし侍は」　（源氏　葵　三一三②）

の「かきくらす心地す」（少女巻までで全三例、少女巻以降も含めると全四例）も、本来は空などが暗くなる意を表す動詞「かきくらす」の比喩的用法なのか、既に心理的な意味が「かきくらす」の固有の意味となっていて、比喩ではなく実感を表しているのか、判定しかねている。

このように実感とも比喩とも取られそうで、どちらとも判別しにくいものがあり[5]、特に身体感覚・心身感覚に関わる表現が目立つ。これらの扱い方によっては数字にある程度の差が生じ得るところである。

【比喩と見られるもの】

前節で掲げた④⑥の「スル心地ス」の例は、比喩か実感かと言えば比喩寄りではあるが、主観的には実際そうであるかのように感じている部分が何割かはありそうな例であった[6]。少女巻まででは

⑯人もなく、月の顔のみきらきらとして、夢の心地もせず。（故桐壺院の）御けはひとまれる心地して空の雲あたりにたなびけり。　（源氏　明石　四四六①）

という例がそれかとも思われるが[7]、むしろより実感寄りと見るべきかも知れない。

この他でかなりはっきりと比喩と見られる例は、少女巻まででは「優曇華の花待ち得たる心ちして」（若紫　一六六⑬）、「ありつる花の露にぬれたる心ちして」（紅葉賀　二五一③）、「光うせぬる心ちして」（葵　三一〇⑭）、「その世にあふ心ちして」（賢木　三六四⑪）、「枯れたりし木の春にあへる心ちして」（明石

四七六⑤）、「大空の星の光をたらいの水にうつしたる心ちして」（蓬生　五一九⑫）といったものが見られた。

これらの比喩の中には「セム心地ス」と比べてとくにはっきりとした特徴が認められないものもある。ただ、「セム心地ス」と比べて比喩の比率が少ないことと、④⑥⑯のような例の存在、若紫巻における優曇華の花の例[8]を除くと、非常に現実離れした事態に例える比喩が少ないといった点は、着目に値すると思われる。

「スル心地ス」については、量・質ともになお検討不十分であるが、「セム心地ス」と比べた場合、「セム心地ス」の方に認められた事実と異なる（とはっきり認識される）事態を想定するという性質が、「スル心地ス」の方では希薄であるということは、一応言えるであろう。

六　おわりに

以上「セム心地ス」「スル心地ス」を比べてみると、全体としてはやはり「セム心地ス」の方には、「セム」の部分で事実と異なる（とはっきり意識される）事態を想定するという性質が強いと言えそうで、これは尾上の「現実と接触しない非現実事態仮構」、尾方法の「事実性を問題としない事態」（中でも「仮想事態」）という指摘と符合することと思われる。

無論、前稿・本稿で取り上げたのは、「ム」などの推量系助動詞が非文末の位置に来るもののごく一部に過ぎない。また、第二節でふれた点も含めて、尾上、尾方らの論とただちに結びつけるにはなお考えるべき点もあるが、第一節で掲げた問題点の解明に向けての一階梯となし得ればと思う。

（注）

（1）『あゆひ抄』は『富士谷成章全集』下巻（風間書房）p八六〇、『古今集遠鏡』は『本居宣長全集』第三巻（筑摩書房）p九による。いずれも表記には若干手を加えた。

（2）漢語「様（ヤウ）」に由来するとする説・「情態言形成のヤ＋副詞的機能を与えるク」が接尾辞から形式名詞化し、更にウ音便化したものとする説（山口佳紀（一九八五））がある。

（3）心理・感情を表す名詞としての「心地」は、「類義語ココロが積極的に対象に向かう意向・意志などの働きに中心があるに対して、事態からその場で受ける気分・感じ」（『岩波古語辞典』）、「当事者がその時点に感じた当座の気分」（中尾比早子（一九九八））といった指摘がある。

（4）一方、「ム」が意志の意味ではなく、「セム心地ス」が比喩になっていると考えられる例で、否定を伴うものはない。半沢幹一（一九九三）は、比喩そのものは否定できない（比喩としての適切さを否定することはできても）とするが、そのことと関係しようか。

（5）中村明（一九八五）では、現代日本語の「目を見はる」「頭が下がる」の類について、「実際にそういう事実（引用者注：「目を見はる」といった文字通りの事実）が……起こっても起こらなくてもどちらでも使う、というレベル」であり、「このように区別の意識が明晰に存在しない段階では、比喩性が起こり得るとしてもその程度に漠然とした存在」であるとしているが、それに近い存在かとも考えられる。

（6）前稿では触れることができなかったが、「スルヤウナリ」にも似たような例が見られる。

あらぬ世によみがへりたるやうにしばしはおぼえ給ふ　（源氏　夕顔　一三七⑤）

現実に源氏が「あらぬ世（別世界）によみがへ」ったのでない

ことは理性的には明白であるが、夕顔の急死・自己の病という異常経験の後の源氏の精神状態においては、ふと実際そうであるかのようにも感じられることもあり得ただろう。

（7）少女巻以降では次の例も挙げられる。

（柏木は女三宮の）うちしめり面やせ給へらむ御さまの、面影に見たてまつる心地して思ひやられ給へば、げにあくがるらむ魂や行き通ふらむなど、いとどしき心地も乱るれば　（源氏　柏木　一二三一⑩）

実際に病床の柏木が女三宮に会ったわけではないが、直前に「まどひそめにし魂の、身にも帰らずなりにしを、かの院のうちにあくがれ歩かば」とあり、引用部の「あくがるらむ魂や…」と併せ、病床の柏木にとっては魂が身を離れて女三宮のもとに通っているかのような感覚があり、女三宮の様子が目の前に見えるというのも、柏木の主観においては何割かは実感に近いものがあろう。

（8）この例は歌における用例であり、歌では「ム」が意志の意味のものを除くと「セム心地ス」が用いられることが少ない（調査の範囲では古今集に「ほえけむ心地して」の一例があるだけ）。この点も考慮すべきかも知れない。

［参考文献］

青島　徹（一九五一）「物語の女の心地もし給へるかな」（『平安文学論究』六）

尾方理恵（一九九六）「推量の助動詞の終止法と非終止法――源氏物語における『む・らむ・けむ』――」（『山口明穂教授還暦記念国語学論集』明治書院）

尾上圭介（二〇〇一）『文法と語彙Ⅰ』（くろしお出版）　第三章第四節「叙法論としてのモダリティ論」　同第五節「国語学と認知言語学の対話Ⅱ　モダリティをめぐって――」（初出『月刊言語』二六―一三　一九九七）

神谷かをる（一九九五）「源氏物語の文章――『心地す』をめぐって――」（『宮地裕・敦子先生古稀記念　日本語の研究』明治書院）

北原保雄（一九八四）『日本語文法の焦点』（教育出版）　Ⅳ「助動詞によるムード表現の史的展開」

金田一春彦（一九五三）「不変化助動詞の本質」（『国語国文』二二―二・三）

小松光三（一九九二）「体言に連なる助動詞『む』の表現――『枕草子』の場合――」（『国語と国文学』六九―一一）

近藤　明（二〇〇一）「『セムヤウナリ』と『スルヤウナリ』――推量系助動詞の文中用法の一端――」（『国文学　解釈と教材の研究』四六―一一）

高山善行（一九九八）「モダリティ形式の連体用法――助動詞ムの場合――」（第二一回中部日本・日本語学研究会口頭発表）

高山善行（二〇〇一）「モダリティ形式の連体用法――『枕草子』を資料として――」（『国語語彙史の研究』二十　和泉書院）

中尾比早子（一九九八）「『心』と『心地』」（『実践国文学』五三）

中村　明（一九七七）『比喩表現の理論と分類』（秀英出版）

中村　明（一九八五）「慣用句と比喩表現」（『日本語学』四―一）

三宅清（一九九六）「助動詞『む』『らむ』『けむ』――連体形の〈推量性〉について――」（『岡山大学教育学部研究集録』一〇一）

三宅清（一九九八）「助動詞『らむ』の意味用法――未定と既定――」（『野州国文学』六二）

山口明穂（一九九一）「平安時代の言葉と思考」（『国語と国文学』六八―一一）

山口堯二（一九九一）「推量体系の史的変容」（『国語学』一六五）

山口仲美（一九八四）『平安文学の文体の研究』（明治書院）　第二部第二章「源氏物語の比喩」

山口佳紀（一九八五）『古代日本語文法の成立の研究』（有精堂）第三章第八節「ゴト（如）の意味」

［資料］（カッコ内に注記のないものは日本古典文学大系による）古今集（新日本古典文学大系）　後撰集（新日本古典文学大系）　蜻蛉日記（新日本古典文学大系）　宇津保物語（宇津保物語　本文と索引）源氏物語（源氏物語大成）　栄花物語　浜松中納言物語　夜の寝覚　狭衣物語　大鏡